

5. 二見の空襲被害

現在の明石市二見地区は、戦争当時、加古郡に属していました。

加古郡二見町にある東亜金属工業(株)土山工場（今の東洋機械金属株式会社）も空襲で被災しました。当時土山工場では、海軍航空機機体及び発動機部品、プロペラ部品のほか、高速魚雷艇用アルミ鍛造ピストンなどの艦艇部品を製造していました。

6月の空襲で、機械工場や倉庫、研究室など10棟2,423坪（工場の約1/3）の建物が焼失し、機械設備も多数焼損しました。従業員も3人の方が亡くなりました。

また、7月24日には、山陽電車東二見駅にとめ置かれていた車両1両が銃撃され中破しました。駅上家（屋根）も損傷しました。

出典：「東洋機械金属六十年史」「山陽電気鉄道六十五年史」

6. 学徒勤労働員（学徒動員）

成年男子が次々と戦場に送られ、働き手が少なくなると食料生産や工場生産、建物疎開の作業などに、学生が動員されるようになりました。これを学徒勤労働員（学徒動員）といいます。

重要な兵器生産拠点となった明石には、たくさんの学生が動員されていました。もっとも多く学徒動員が行われたのは川崎航空機でした。動員されたのは主に兵庫県内の学生ですが、遠くは和歌山県からも学生が動員されていました。

川崎航空機（機体工場）に生徒を派遣していた学校（学校名は、当時の名称）

通勤	男子	明石中、航空工業、 県立第一神戸商業学校
	女子	親和高女、山手高女、 須磨女子商業学校、明石高女
寮	男子	洲本中 (県外) 和歌山中、海草中、 第三高等学校
	女子	社高女、出石高女 (県外) 県立和歌山高女、 市立和歌山高女、粉河高女、 笠田高女、箕島高女、 古座高女、新宮高女

出典：明石空襲の碑をつくる会「明石の空襲」

明石中学における学徒勤労働員の内容

1年生	燃料（薪）あつめ
2年生	農作業
3年生	川崎航空機へ ※1
4年生	神戸製鋼へ
5年生	軍事教練 ※2

※1 1月19日の空襲以後は、工場機能は麻痺していたため、学徒動員は近住者のみとなった。また、一部の学生は、防空要員（警戒警報が鳴れば、配置場所へ移動し、周辺住民を防空壕へ避難させる）を兼務していた。

※2 「決戦教育措置要綱」により、1944年（昭和19年）からは、一年の授業停止、卒業繰上げとなった。

※ 次ページの田辺家政（田辺高等家政女学校）・神戸野田高等女学校・県立第四神戸中学校・県立第一神戸商業学校・小野高等女学校のように、川崎航空機（発動機工場）に勤労働員されていた学校もあります。

学徒動員の犠牲者の記録

1月19日、明石工場は昼休みがすんで午後の作業開始直後、警戒警報が発令されたため、田辺家政の生徒たちが所定の防空壕に駆け込むのと同時に空襲警報が発令された。引率の国本はそのとき、寮当番の生徒が見えないのに気づき寮にとって返してその生徒を連れて壕にかけこんだ。その直前、第一陣のB29の8機編隊が頭上をかすめ、隊長機らしい1機が赤い布を投下、それを合図に爆弾投下が始まったのを国本は目撃していた。

次の編隊が襲うまでのほんのわずかの時間を縫って、国本はそれぞれの壕の生徒の無事を確認して回ったが、ある班の壕に水がたまっていたので、真冬の寒い日に風邪を引かせてはと、怖気づいて尻込みする生徒を叱りつけて、隣の壕へ無理やり移らせた。第2波の投爆、その水溜りだった壕に直撃弾が落ち、国本は胸をなげ下ろしながら、隙を縫って又次の壕へ確認に走ろうとしたところ、割当てない別の壕に生徒の和田周子の顔が見えたので驚いてその壕に走り込み、「どうしてここへ入ったの？」と叫びながらも生徒を確認、「しっかりしようね」と声を掛けて次の壕へ走ろうとした。そのとき入口近くに居た和田が心細そうな声で「先生、ここに居てよ」といったので、「全部の壕を見てから来るね」と言い残して次の壕へと走った。

一通り確認を終えたのち、和田らの居る壕へ走ろうとしたら、一足早く中年の男性がその壕に入ったので、「これは満員」と、そのひとつ手前の壕に飛び込むのと同時に又何度目かの投弾、「一きわ物凄い振動に大音響！」これは近い爆発と思い持ち合わせ座布団を傍の柏山さんの頭にかぶせて自分は壕外に飛び出してみました。バラバラと赤土を肩にうけながら左右の壕を見廻した時、あっ和田さんが見えない。たしかここに壕があったはず」なのに壕は跡形もなく消えてしまっていることを知るや、半狂乱になって寮の事務所に駆け込み「私の生徒が爆弾でうずまった。早く掘り出して。スコップを貸して」等々叫び、頭上を米軍機が飛び交う中、生徒の名を呼び、「返事してよう！」「待っててよう！」と大声で泣き叫び、時には爆風で気を失いながらも、素手で付近の土くれを掘り続けた。

悲報はまもなく学校に届いた。「1月19日 明石工場出勤の学徒11名殉死す。国本教諭は杉本囑託と共に救出作業に続く善後処置に多数の生徒を抱えて文字通り寝食を忘れて敢闘す。」

20日早朝校長や数人の先生、父母・兄弟の代表、亡くなった生徒の父兄が明石に向かった。午後遺体が収容されている寺に到着したが、そこには憲兵が張り付いて立ち入り禁止となっていて、遺体との面会は許されそうになかった。国本は「捨て身の私には憲兵の怖さも忘れ、遺体との面会許可を申し出」た結果、時間を制限されて許された。遺体の茶毘は何時のことやらわからなかったから、親たちは後ろ髪を惹かれる思いで帰途についた。

24日夜、国本は漸く遺体が茶毘に付せられることと、明早朝の骨上げを連絡された。粉雪の舞う寒い夜、11人の子どもたちは親にも先生にも学友たちにも見送られることなく、茶毘に付された。

25日朝、まだ粉雪が舞うなか、11人と生前もっとも親しかった友人を伴って骨上げに向かった国本は、火葬場の扉があげられると一瞬目まいで倒れそうになり、火葬場の職員に支えられて漸く気を取り戻し、「一つでも多くのお骨をと思い、まだ温もりのあるお骨を箱いっぱい」に拾い上げ、級友の胸に抱かれ故郷に帰った。25日夕刻、田辺駅も粉雪が舞っていたという。

「和歌山県教育史研究」第3号より 抜粋・引用

神戸野田高等女学校（現：神戸野田高等学校）の女学生1人が、この壕と一緒に入っていて亡くなっています。また、工場内では、逃げ遅れた県立第四神戸中学校（現：県立星陵高等学校）の生徒が、3人死亡しています。（創立五十周年星陵記念誌より）

この他にも、6月9日に退避先の明石公園内で、県立第一神戸商業学校（現：県立神戸商業高等学校）の生徒が、8人死亡しています。